寄稿

司馬遼太郎×池波正太郎　生誕 100 周年記念

歴史・時代小説は大人の日本人の嗜み、そして永遠の友

―― 二大国民作家の代表作から、今なお輝き続ける巨匠の魅力を探る――

前編　司馬遼太郎

司馬遼太郎記念館友の会　サポート会員
メインストリート・マネジメント・リサーチ合同会社　代表
松本　博之

壱　はじめに

いわゆる「出版不況」なるものが叫ばれて久しい。しかしながら、今なお多くの書店の書棚（特に文庫本コーナー）で大きなスペースをとって並べられているのが、俗に「一平二太郎」と言われる３人の作家の作品である。３人ともに昭和という同じ時代に「歴史・時代小説」というジャンルで活躍した。それぞれの作風で多くの読者を魅了してやまない作家たちである。言わずと知れた、「一平」が藤沢周平、「二太郎」が司馬遼太郎と池波正太郎、その人たちである。

さて本年、2023 年は「二太郎」の司馬遼太郎、池波正太郎両氏の「生誕 100 周年」にあたる記念すべき年だ。そこで「一平二太郎」を愛してやまない一人の読者として、紹介するその作品の数は紙幅の関係で限られるが、彼らの代表作に触れながら、巨匠たちの今なお輝き続ける魅力の根源を探ってみたい。前編となる今月は司馬遼太郎、後編は池波正太郎について取り上げる。

弐　時代小説とは、歴史小説とは

まず本論に入る前に、少し整理をしておきたい。皆さんは時代小説と歴史小説との違い、また歴史小説と歴史学との違いなどを知っておられるだろうか？　筆者も含めて日頃から余り意識もせずに時代小説も歴史小説も一緒くたで読んでいる向きの方も多いであろうと思う。いやいや、そこにはしっかりとした線引きがあるのだ。

しばらく専門家の知識を借りながら筆を進める。歴史家磯田道史氏や作家里中哲彦氏によると、一般的に歴史小説や時代小説といわれるものは、大きく時代小説、歴史小説、史伝文学の３つに分類される。

中でも史伝文学は史実や歴史学に最も近く、時代小説が最も遠いもので、言い方を変えると時代小説が最もフィクションの要素が占める割合が大きいものとなる。

今回取り上げる司馬遼太郎（以下、司馬さん）の作品のほとんどが歴史小説であり、池波正太郎と藤沢周平の作品は時代小説の範疇となる。しかしながら司馬さんは「坂の上の雲」について、「これは小説ではない、史伝である」（詳細は後述）と言っている。

ではここで、この３つの分類のイメージをつかみ易くするために、先ほどの２人の専門家のお考えと筆者の意見も交えて、皆さんがよくご存知の作家名を当てはめておこう。

まず緻密に史料調査を行いそれにもとづいてフィクションの要素を極力抑えた小説、史伝文学となるものを書いた作家として、吉村昭や海音寺潮五郎があげられる。自らが調べ上げた細かな事実を読者に見せて悟らせるという作家、作品である。吉村昭は自らの作品を「記録文学」と呼んでいた。彼は、「第一回司馬遼太郎賞」の受賞者に推挙されたが、これを断ったという。吉村には自らの作品と司馬さんが書かれた歴史小説というジャンルとは一線を画すという思いがあったとも推察できよう。

次に史伝文学と同様に緻密に史料調査をするものの、伝える事実は作家が取捨選択し、取り上げる史実の濃密度も作家の思いによって濃淡をつけ、一部について（登場人物等）フィクションの要素も取り入れるのが歴史小説である。歴史小説の代表的な作

家といえば、司馬さんと「ローマ人の物語」で有名な塩野七生があげられる。

最後に基本的な時代設定やその時代の風俗等はそのままに、実在や架空に留まらず自由に登場人物が活躍するもの、例えば池波正太郎の“鬼平犯科帳”や、藤沢周平作品のように架空の“海坂藩”を舞台にそこでの出来事を小説とするもの、これが時代小説である。余談だが、最近は時代小説の方が人気面では歴史小説に勝っているように思われる。出版される点数も時代小説の方が圧倒的に多い。作家も時代小説には挑戦するものの、史料を読みこなし、綿密に取材するのが時間的に難しいのか、億劫なのか長編の歴史小説には余りお目にかかれなくなった。

参 司馬さんの小説技法

ここでは、司馬さんのエッセイや講演録等のなかから、司馬さんがどのような思いで日頃から作家活動をしていたのか、また小説を書くための技法についてどんな視点を持っていたのかについて考えてみたい。

① 歴史を俯瞰的な視点でみる

「ビルから、下をながめている、平素、住み慣れた町でもまるでちがった地理風景にみえ、そのなかを小さな車が、小さな人が通っていく、この視点の物理的高さを好んでいる。」と司馬さんは言っている。歴史を俯瞰的な視点でみるということが、数々の名作を生んだ司馬さんの歴史の見方の原点であった。まさに天からの視点で人と地、そして歴史を描こうとしたのである。司馬さんが知っていること、緻密な史料探索から得られた多くの史実の中から俯瞰的な視点で、司馬さんが伝えたいことや読者が知りたいと思われる史実を巧みに取り上げて焦点を絞り、多くの人がわかり易い文章で紹介をしている。

② 歴史が緊張していないと小説にはならない

「歴史が緊張し、緊張のあげくはじけそうになっている時期が、私の小説には必要なのである。」司馬さんの歴史小説の真骨頂に戦国時代や幕末・明治維新のような変革期、変動期というものが多い理由が、この一言でうなずける。変動期を大きな舞台として、そこにいる人間たちのことを見て、考えていくことが歴史小説に適しているという訳である。社会が変革する時こそ、人間の本質が見えてくることから、「*変動期の人間たちを*自然に書くことが歴史小説になる」とも語っている。（*斜体*箇所は筆者が追加）

③「完結した人生」を書くこと

「歴史小説は『過去』とか『むかし』『歴史』ということばではなく『完結した人生』を書くことである。」また「時間が経てばたつほど、高い視点からその人物と人生を鳥瞰することができる。いわゆる歴史小説を書く面白さはそこにある」とも言っている。ある人間の完結した人生、言葉を変えると「乾ききった人生」である。司馬さんが「坂の上の雲」は史伝として書いたということの意味は、「坂の上の雲」は日露戦争という事象を扱っており、執筆当時多くの関係者が存命である主人公たちの“生乾き”の人生を描いたため、フィクションを入れる余地が少ない史伝として大変苦労したことがわかる。

④ 時代に溶け込めず、不器用だがぶれない男たち（決してヒーローにあらず）

司馬さんはエッセイ「男の魅力」の中で、「私は、作家として、一生、男の魅力とはどんなものかを考えつづけ、私なりに考えた魅力を書きつづけようと思っている」と書いている。

司馬さんが考えた魅力ある男たちが当然のごとく作品の主人公となるわけだが、例えば石田三成、黒

余談ですが…

龍馬？竜馬？司馬さんは竜が好き？

司馬さんが「龍」ではなく、「竜」を使ったのかは謎の部分が多い。ただいくつかの説を当時の編集者たちの言葉から垣間見ることができる。

まず一つめ、ある時、「なぜ、竜馬なのか」と編集者に問われて、「僕は歴史学者じゃなくて小説家だろ。この小説で、ぼくの好きな竜馬を書く」と言ったそうだ。歴史学の世界では「龍馬」が一般的に使われていて、小説家としてそれとはっきり違いを見せたかったというもの。

もう一つ、みどり夫人によると、「龍の字がごちゃごちゃしていて、司馬さんは『竜』の方が好みだったから」という説もある。

田官兵衛、大村益次郎、河合継之助、秋山真之、そしてこの後触れる土方歳三、坂本龍馬らも必ずしも時代の流れに上手く適応できた人たちとは思えないし、周囲とも噛み合わないところが多い男だったと言えよう。

そしてもう一つ、イデオロギーというものに惑わされず自分の理念にそった合理主義者で、それぞれの思いで人生を駆け抜けた男たちであった。

肆 代表作からみる司馬作品

さてここから司馬さんの３つの代表作から、改めて司馬さんの魅力を探ってみる。

司馬さんは、長編小説を約 40 作品、その他講演録、対談集、エッセイ、紀行文や歴史・文明批評などを含めると全集は全 68 巻となる。その数多有る司馬さんの作品の中から、本稿では「竜馬がゆく」、「坂の上の雲」、と「燃えよ剣」の３作品に触れる。

ちょうどいいことに、司馬さんの生誕 100 周年を記念して、司馬遼太郎記念館で実施した「好きな司馬作品ランキング調査」の結果がある。偶然にも本稿で紹介しようと考えた３作品がトップ３となった。

司馬さんの人気小説ランキング

１位	**坂の上の雲**（文春文庫全８巻）
２位	**竜馬がゆく**（文春文庫全８巻）
３位	**燃えよ剣**（新潮文庫全２巻）
４位	**街道をゆく**（朝日文庫全 43 巻）
５位	**峠**（新潮文庫全３巻）
６位	**花神**（新潮文庫全３巻）

出所：司馬遼太郎記念館 2023 年インターネットアンケート調査より

① 竜馬がゆく

――忘れられていた坂本龍馬

司馬さんの作品を批判する人たちの多くが、「司馬さんの作品は歴史の英雄ばかりにスポットライトを当てる、“英雄史観”である」という論陣を張る。これは全くの間違いである。歴史に埋もれていた男の人生を司馬さんが自身の作品に取り上げることで、日本史の英雄になったと考えるのが本当の姿であろうと思う。その意味では坂本龍馬は典型的な事例と言える。

司馬さんも書いておられるが、坂本龍馬は明治という時代において全く忘れられた存在であったし、もっと言うと薩長連合によって作られた近代明治国家において、土佐出身の共和主義的な匂いを持った人物については触れるのもタブーとされていたのである。

――8,000 部から大ベストセラーへ

司馬さんが産経新聞で「竜馬がゆく」の連載を始めたのは 1962（昭和 37）年６月 21 日、日本は高度経済成長期であった。連載は約４年間続き、その間に東京オリンピックが開催され、東海道新幹線の開通など国民は高度経済成長を謳歌することとなった。多くの人々が豊かな、明るい将来を感じられる時代に、司馬さんは「竜馬がゆく」を発表した。わずか 8,000 部という数字からスタートした「竜馬がゆく」。ある出版統計によると、2022 年までに累計販売が約 2,500 万部という大ベストセラーとなった。当時、発刊された単行本は全５巻で完結となるわけだが、１、２巻の売り上げは捗々しくなかった。３巻の発売頃から評判を呼び始めて、完結するころには、「今までにないスケールの小説を書く大型作家」と世間の注目を浴びることになる。「竜馬がゆく」では、司馬さんは先述のように、幕末・明治維新という日本史の激動期において、その俯瞰的な視点から多数の人間観察を行い、その実体をわかり易く整理して、歴史小説を大人の文学へと導いていった。

「竜馬がゆく」は激動の変革期にある日本人がどう生きたかという事実を追求した作品であり、そこには陳腐なイデオロギーなどは存在しないし、司馬さんが言われているように主人公である竜馬も「彼には前時代的な教養がなかった。イデオロギーがなかった」のである。倒幕や尊王攘夷に命をかけることもなく、明治維新すらも片手間だった男の青春群像劇として、多くの人に勇気と希望を与えた作品と言える。

②坂の上の雲

――40 代の全てを費やして

司馬さんは、「坂の上の雲」について以下のように語っている。「『坂の上の雲』は長大な作品で、しかもほんの最近の事件です。いい加減なことも書くわけ

にはいかないので、非常に神経を使って、ヘトヘトになりました。小説はフィクションなのですが、フィクションをいっさい禁じて書くことにしたのです。」

司馬さんにとって「坂の上の雲」の執筆には大変な苦労が伴ったことがわかる。「坂の上の雲」はほんの最近の事件であった。司馬さんは歴史小説の醍醐味として「完結した人生」を書くことだと言っている。しかしながら、「ほんの最近の事件」であった日露戦争は“生乾き”の事件であったため、登場人物の関係者によって、司馬さんが書かれたことを認めたくないという人たちも多かったのである。

「坂の上の雲」は、司馬さんにとって、その準備や執筆で彼の40代での大半の時間を使った作品である。かつて在籍した産経新聞に1968年4月から72年8月まで連載された長編である。また「映像化は無理」とも言われたが、2009年から2011年まで3年にわたりＮＨＫでドラマ化された。これにより作品発表から約40年を経て、新たに大きなインパクトとなったことは間違いないところである。

――高まる評判、抗議も急増

「坂の上の雲」も、新聞連載中に単行本を順次発刊していった。すると第3巻の「日露戦争」の場面にさしかかったところから急激に売れ出し、「第4巻はいつ出るのか？」という読者からの問い合わせが殺到したと言われている。坂本龍馬と同様に1960年代、当時としては殆ど注目されていなかった「日露戦争」を書いて評判が高まる一方で、通説と違う箇所が指摘され、異を唱える人たちからの抗議も急増したと言われている。因みに司馬さんはその辺の苦労について、第4巻のあとがきで、「この作品は、小説であるかどうかじつに疑わしい。ひとつの事実に拘束されることが100パーセントに近いからであり、(中略)どうにも小説にならないものを選んでしまった。」と述懐している。

――文明の中での日本人の本質を探る

司馬さんの「坂の上の雲」を通じての読者へのメッセージとは何だったのだろうか？ 磯田道史氏や作家の関川夏央氏などが書籍として発表されているので、ここで筆者が改めて述べることは差し控えさせてもらう。敢えて一つ言わせていただくと、明治維新後に日本人が初めて対峙した「文明」というものに対して日露戦争を題材としてどのように対処したのか、その事実を公平に評価し、合理的な視点によって褒めるべきものは褒め、叱るべきところは叱ることによって日本人の本質なるものを伝えたかったのではないかと思う。そして登って行った坂の上の向こう側には、「昭和」というある意味、恐ろしい泥沼の時代(満州事変から太平洋戦争へ)があったのである。

イデオロギーで是非を決め、それによって盲目的に歴史を断罪するのは、至って簡単である。しかし司馬さんは「事実はどうなのか？」と思い、10年もの長期間をかけて、明治という時代をもう一度生きてみよう、事実をしっかりと確かめてみようという努力をされたわけで、それが「坂の上の雲」となったのである。その努力は多くの日本国民、特に当時日本経済を動かしていた財界や一般ビジネスマンに受け入れられたのである。

③燃えよ剣

――「竜馬がゆく」と同時期に執筆

新選組副長である土方歳三を主人公にした「燃えよ剣」は奇しくも、「竜馬がゆく」と同じ年の11月から週刊文春で連載が始まった。激動の幕末に全く違う信念でそれぞれの人生を駆け抜けた2人のサムライについて同時期に司馬さんは執筆したことになる。司馬さんの作品の中で、“幕末もの”は多いが、「燃えよ剣」は前出の「竜馬がゆく」と並んで双璧と言えよう。読者の人気を二分している。

執筆された当時は、新選組と言えば局長の近藤勇の人気が圧倒的で、土方はヒール役だったそうだが、司馬さんは一つの小説で人気を逆転させたばかりでなく、土方歳三のイメージを形作ってしまった。

――司馬さんが求めていた「男の魅力」、それが土方歳三

土方が幕末の歴史に顔を出してくるのは、たったの5年余りである。土方は35歳で生涯を終えるわけだが、25歳で天然理心流に入門し、29歳で入洛する。そこから箱館五稜郭で最期を迎えるまでのたった5年間で、彼は作家司馬遼太郎を魅了する男となった。

司馬さんは「『燃えよ剣』では、男の典型を一つずつ書いてゆきたい」と述べている。彼は新選組を最強の剣客集団にするという自らの人生に明確な主題

余談ですが…

司馬さんと神田神保町

司馬さんは史料収集に入ると、神田神保町から関連の書籍等が一斉に姿を消すという逸話が残っている。「とにかく関係するものは残さず集めてくれ」と、神田神保町の老舗古書店である高山本店から神保町の古書店にお触れが回るのである。

ちなみに「竜馬がゆく」の場合、集まった史料は3,000点（冊）、金額にして当時で1,000万円ほどだったそうで、現在の1億8,000万円相当となる。

を設定し、迷わずためらわず一筋に道を進んだ。その結果、「新選組という、日本史上にそれ以前もそれ以後も類のない異様な団体をつくり、活躍させ、いや活躍させすぎ、歴史に無類の爪あとを残した」のが土方歳三と司馬さんは言っている。また、「人間の意地を見事に貫いた。彼は気概に生きた人」とも語っており、その人生は司馬さんが「男の魅力」を語るのにこれ以上ないものだったのだろうと推察する。

――「組織作り」と土方歳三

司馬さんは、「燃えよ剣」の執筆に関して、早い段階から「組織づくり」を題材にすることを考えていたのではないかという分析がある。土方が新選組という日本史においても稀な機能的な集団を作った。当時の組織としては非常に珍しい1本のラインによる指揮命令系統を持った組織であったのも土方の能力によるものであった。土方は、イデオロギーは組織の敵であり、人間を惑わすものとして合理的な思考を終始一貫して貫いた。そして自らの志の終着点として、死を選んだ。「人間は万世に照らして変わらないものがあるんだ」として死によって完結する道を選択したこと。これらを司馬さんは、昭和の高度成長期、新しい国づくり、組織づくりを目指していた国民に示したかったのかもしれない。事実、「燃えよ剣」は現実と重なる組織づくりで絶大な人気を博していったと言われている。

伍 「司馬史観」とは何だったのか？

本稿の目的とはやや異なるが、やはり司馬さんの作家人生について語るときに「司馬史観」なるものに触れないわけにはいかない。「司馬史観」とは、当の司馬さん自身はあずかり知らぬところで展開されていたように思える。前述の歴史家磯田道史氏の言葉を借りれば、「作家生活の後半は多くのエッセイや史論を発表することで、『小説家』から『歴史家』と思われるようになった」というように司馬さんの社会的な評価が変わっていったことが一つの要因となろう。

また司馬さんは「竜馬がゆく」「坂の上の雲」、「翔ぶが如く」等で、明治維新以来の近代国家としての日本がどのように準備、実行そして絶頂期へと進んでいったかを描いたが、歴史学では「司馬遼太郎」を論じることはほとんどなかったし、学問として歴史は司馬遼太郎に触れてこなかった。

しかしながら、司馬さんは彼の代表作を通して、戦後の日本において歴史学を席巻していた明治時代以来のほとんどを断罪するマルクス主義の左翼史観に立ち向かうこととなり、それを打ち負かしていったのである。ある歴史家の言葉を借りれば、「司馬さんは左翼人から見れば『天敵』であり、左翼人が戦後、作り上げた歴史観を司馬さん一人で、『坂の上の雲』で壊していった」となる。司馬さんの立ち位置は「この国はイデオロギーばかりで、皇国史観の次は左翼史観、それは違うよね」というものだったと推察する。司馬さんはイデオロギーなどというものに左右されない、歴史の中で織りなした人間像の素晴らしさと活力、たくましい意欲を、司馬さんの好きな言葉に置き換えれば「人間の気概」を書きたかったのである。

僕は「司馬史観」なんて知らない

当の司馬さんは「歴史観」についてどう語っているのだろうか。司馬さんは「史観というような言葉をぼく自身は使ったことも書いたことも、口語でしゃべったこともないと思います。（中略）歴史小説というものは人間を書くための小説であって、歴史を書くための小説ではないのであります」と語り、また「なぜ小説を書くのか」の中で、「日本史は通史として江戸末期の頼山陽によって書かれた『日本外史』が最初ですが、朱子学史観（水戸学史観・皇国史観）に染められたものでした。（中略）明治以後、アカデミズムもふくめて皇国史観か、マルクス史観による歴史研究がぜんぶといってよく、それらを、無触媒の方法をもって一市民の立場から脱色し、取捨し、選

択しなおし、自分の目と体温を通して、無着色の日本史を、私室の中で、編みなおしました。」と語っている。「自分の目と体温」で編み直し、「思想的」に脱色し無着色にしたうえで世に問うた歴史の見方について、その後多くの人は敬意をこめて「司馬史観」と呼ぶようになり、批判的な意味での「司馬史観」は薄れていった。

陸 司馬さんと昭和史、「書かなかった、書けなかったノモンハン」

終わりに、司馬さんと昭和史について探っていくことにする。筆者だけでなく多くの作家や編集者たちが、司馬さんに昭和史について書いて欲しかったと今でも思っている。

では具体的に何についてかというと、司馬さんのファンであれば既に察しがついていると思うが、「ノモンハン事件」である。司馬さんは関連する膨大な史料を集め、確かに書こうとした。しかし書かなかった、いや書けなかった。

司馬さんは後に執筆を断念した時に、「質屋の番頭さんが持っているような大きな風呂敷に史料をつつみこんで一切みないようにしている」とも、「小説にしようとしたが、軍指導部のあまりのでたらめぶりに、書いていたら憤慨のあまり死んでいたかもしれない」とも語っている。別の観点から推察すると、歴史的に“生乾き”だった日露戦争、「坂の上の雲」を書いたときにあれだけの苦労を重ねることになったのであるから、“びちゃびちゃ”に濡れている昭和史、ノモンハン事件を書くことは到底不可能だったのであろう。

司馬さんとは、作家と文藝春秋の編集者という関係以来、長年付き合っていた歴史探偵・作家の半藤一利さんも司馬さんにノモンハン事件を書かせたかった一人（おそらく一番書いて欲しいと願っていた人かも知れない）である。半藤さんによると 1985 年にこんなやり取りが残っている。

半藤さん：「ノモンハンはいつお書きになりますか？」
司馬さん：「とにかく書きたいと思っているが…」
と言葉を濁した。

また、その後のある対談でも司馬さんは「私はこれまで昭和を主題にしたことを書いたことがないんです。たとえば、ノモンハン事件はきちんと書いておかなければいけないな、と 17 ～ 18 年前から史料だけは集めていますが、結局書けないでいる」としている。

そして、司馬さんは「もうノモンハンは書かない」と言いだした。「ノモンハンについて書くことは、私に死ねと言っているのと同じ」とまで言うようになったと半藤さんは記している。

関東軍や陸軍参謀本部など司馬さんが最も毛嫌いし、愚劣とする人間たちを書かなければならない。彼らは統帥権という“化け物”を利用し、悲惨な戦闘で多くの人を殺したのである。その典型とも言えるのがノモンハン事件だったのでる。「調べつくしたが、調べていけばいくほど空しくなった」と語った司馬さん。半藤さんには、事件、兵器となった戦車、関東軍や参謀本部について余すところなく話をしてくれたという司馬さん、ついに原稿用紙に向かうことはなかった。

※ごく簡単にノモンハン事件について…
1939 年 5 月～9 月にかけて満州国とモンゴル人民共和国との国境線で断続的に起きた日ソ国境紛争の一つ

漆 おわりに

今でも色あせない司馬文学

司馬さんの作品は、小説であって小説でなく、文学であって文学でないと言える。であるから今でも多くの人に読まれている。また「色あせない」のは歴史小説という「現代小説」でもあるからだ。司馬さんの全ての作品が、歴史と人間について深く掘り下げて、わかり易い文体で語りかけてくれる。そこには、戦国時代も幕末もなく現在の自分、読者自身が存在するのである。

常に「日本とはどんな国なのか、日本人とは何か、人間とは何か」を問い続けた司馬さん。小説家としてでもよいし、歴史家としてでもよいが生誕 100 周年を迎えた今の日本を、日本人を、そして世界の在りようについて、どうお考えになっているのか聞いてみたいと思う。